2023/9/30

リトルハウス通信

今月のリトルハウス通信は、就労継続支援B型施設（以下、B型という）であるリトルハウスにおけるソーシャルワーク実践の取組みについて書いていきたいと思います。

私が社会福祉士/精神保健福祉士としてリトルハウスでソーシャルワーク実践をするにあたり、生活における「自立」とはなにか？ということをよく考えます。

そこで少し長くなりますが「ソーシャルワークへの招待」という著書の中にある一文をまずは引用しご紹介したいと思います。

この著書の中で北川は、社会福祉が捉える「自立」について、『人間は、多様な環境の中で、その環境と交互作用を通じて生活を営むことになる。したがって、単に生命維持が継続し「生存」しているだけの状態を指して「生活」と呼ぶことをしない。その人独特の身体構造や習慣、習性に基づく「活動」あるいは意識的な「行為」を含む「行動」が伴う全体を指して「生活」と表現すべきだろう。さらに「生活」は、日々変化する特徴を持ち、この変化の過程を通じて人間としての成長・発達が促進されることになる』

私はこの一節を読むにつけ B 型施設のソーシャルワーク実践を言い当てていると感じます。それは「B型という環境」の中で作業やレクリエーション、面談、雑談、ミーティング等々を行いながら、仲間と共に交互作用を通して生活をしていると言えるからです。即ちB型の中にはまぎれもなく「小さな社会」があり、そこに「生活」が存在するということです。

そして前号のリトルハウス通信にも書かせて頂いた、本人固有の「リカバリー」（あるいは「パーソナルリカバリー」）を模索し、更に大きな社会である「地域」の一員として充足感を持って「生活」することが、「自立」への道のりではないかと、私は現時点で考えています。

そして北川が本文で示している通り、「生活」は日々変化し、その変化を通して人は成長していくという点に私は注目しています。もし変化と成長がイコールであるならば、その変化をどう促していくのか？ということがB型におけるソーシャルワーク実践の一番難しい点であり、しかし大きな意義のある行為だと私は考えます。それはリトルハウスを「安心して過ごせる環境」に整えながら、同時に「成長」を促していくことを目指すということです。

■引用文献

北川清一/久保美紀編著　ソーシャルワークへの招待 P10-11（2017）ミネルヴァ書房